

藝える 19

藝大留学生のかつてといま

「藝える」第19号

東京藝術大学

東京藝術大学広報誌
『藝える』第19号

発行日
2026年10月15日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
大野真琴(アリヤマデザインストア)

写真
長島有里枝
(表紙、P2-9、11)

高橋マナミ
(P13、17-18、20-22、25中下、27)

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学企画総務課

印刷
シナノバブリッシングプレス

藝える



「藝える」は「^うえる」と読みます。今号は留学生特集です。留学といえ

ば、遣唐使の時代にまで遡ります。使節団帰国後も長期間留まり勉強を続けた者を留学生と呼びました。一方、使節団に同行し短期で学を修め、使節団と帰国する者を還学生^{げんがくしょう}と呼びました。空海は20年間滞在予定の留学僧でしたが、2年で密教の奥義を習得して帰国します。さて、時代は変わり近代へ。大学という教育研究機関が生まれ、そこが「留まり学ぶ拠点」となりました。今回は本学に海外から来た留学生の歴史と現在の、ほんの一部の紹介です。歴史の荒波にもまれながらも、いかに留学生たちが芸術文化の国際的な発展に貢献してきたか、そして深い探究心と批判的思考をもって現代に立ち向かう留学生がいることを、お伝えできたら幸いです。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

特集

目次

01

留学生が 文化をつなぐ

現代編

02

イラン出身
大学院美術研究科
グローバルアートプラクティス専攻 修士2年
パルディース・ガーセミー・
ラシュクソフラさん

06

オーストラリア出身
大学院音楽研究科
器楽専攻(ヴァイオリン) 修士1年
ジュリア・ヒルさん

09

中国出身
大学院映像研究科
アニメーション専攻 2020年修了
羅絲佳さん

28

授業SANKAN

理論あつてのアカデミア。
芸術大学で芸術を学ぶということ
美術学部芸術学科

38

お知らせ

歴史編

12

美術の近代化で、
国の発展を。
東京美術学校に学んだ
中国人留学生たち

18

朝鮮半島の近代美術を
拓いた留学生たち。
支配、被支配の歴史を、
作品は超えていく

23

欧米、東南アジア、
ユーラシアからも。
東京美術学校で学んだ
諸国学生の横顔

24

芸術の力で、
国と人々の立て直しを。
東京音楽学校に学んだ
中国人音楽家たち



留学生が 文化を つなぐ

特集

1916 (大正5) 年、東京・神田で撮影された中国人留学生たちによる美術団体「中華美術協会」の集合写真。中央列左端が、東京美術学校に学んだ胡根天。提供＝胡宇清

現代編

イラン、オーストラリア、そして中国から。
異なる文化のなかで新たな自分と表現を探す彼女たちは、
なぜ藝大を選び、自らの世界をどう押し広げていくのか。
それぞれのまなざしが照らし出す、創作の現在地。

バルディースさんの作品《Human Dome》
のモチーフは女性の体。乳房の先端は尖り、
イデオロギーで孕んだ腹には旗を掲げる。

イラン出身
大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻 修士2年
パルディース・ガーセミー・ラシュクソフラさん



Pardis Ghasemi Rashksofla / 1999年イラン・ケルマーン州生まれ。東京造形大学絵画専攻領域(版表現)を卒業。ZOKEI展(卒業制作展)でZOKEI賞受賞。2025年より東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻に在籍。『東風Pardis Ghasemi × KID ROSE』(Den Den、浅草、2025)、『The Borders』(Gallery Mugen、巣鴨、2025)など、実験的な企画展で発表を続ける。

「既知の環境や慣習に左右されることなく、より多様で自由なアプローチを学びたい」と考えたパルディースさん。海外留学を目指すなか、入学金や授業料に加え、生活費を賄う給付金や渡航費までを含むフルファンディングで支給される奨学金を探したときに、見つけたのが日本の文部科学省による国費留学生の募集だった。

申請が通るまでの2年間、イラン最古かつ最大規模のテヘラン大学で日本語と日本文化を学び、2020年9月に来日が実現した。まずは美術の専門学校に入り、東京造形大学の3年に編入。版画を専攻し、ファインアートについて学び始めると、表現できることの可能性を大きく感じたという。

「東京造形大学に進学する前年の2022年9月に、イランで『女性・命・自由』という運動が起きました。きっかけとなったのは、マフサ（ジナ）・アミニという22歳の女性の死でした。彼女は、髪を隠すヒジャブの着用方法が不適切であるとして道徳警察に拘束され、昏睡状態となり病院に搬送されたものの、その3日後に亡くなりました。マフ



サ・アミニは運動家などではなく一般女性でしたから、そうやって拘束されたのは自分だったかもしれないし、自分の母親や姉妹だったかもしれない。そんな危機感から、女性たちが立ち上がったのです。私はそんな状況でアートを通して女性の自立に言及できると考え、多様な表現に目を向けました」

シルクスクリーンで手刷りしたZINE。既存の規範に抗う切実な思いを綴り、DIYで手がける姿勢も含めまさに「パンク」な作品。

パフォーマンズが生む連帯感

版画を専攻した経験から、シルクスクリーンやコラージュなどの技法を駆使して、手刷りでZINEを制作するようになった。そこには、ジエンダーや思想によって重苦しい制約がある状況で自らの尊厳を問い直す、切実な言葉が綴られている。「特定の社会構造が個人の自由を規定することへの違和感」と、「自立して意見を言えるカッコいい女性への憧れ」を抱く彼女は、自分に適した表現を模索するなかで、東京造形大学在学中にパフォーマンス作品にも挑戦した。「イランでは当時、若い人たちが権力によって管理されることに對する怒りや抵抗の感情を映像に収め、SNSで拡散することによって連帯を広めていました。私にとってアートとは、自らの意思を表明する手法のひとつであり、制約下における自立の回復を表す手段として身体表現に可能性を見いだし、抑圧に抗おうとするエネルギーを、ボールを蹴るという行為で具現化するパフォーマンス作品

を計画したのです」

初めてのパフォーマンス作品だったため、すべてが手探りの状態だった。しかし、作品を発表してみると、「オーディエンスが近くにいる、インタラクションが生まれるメディアウム」だという手応えを感じたという。絵画で強い女性の姿を表現することや、ZINEに自分の意思を表明することに魅力を感じながらも、パフォーマンスについて学び、その可能性をより深く知りたい。その思いから、パルディースさんは東京造形大学を卒業後に藝大大学院のグローバルアートプラクティス専攻（以下GAP）への進学を決めた。

与えられた価値観に縛られず

GAPに所属し、多様な国や地域からやってきた人との交流を重ね視野が広がった。また、GAP主催の視察プログラムで、イランと同様にムスリムがマジョリティであるインドネシアを訪れたことで、「宗教にまつわるトラウマのようなものが徐々に和らいだ」と、笑顔を見せながら流暢な日本語で話す。

「インドネシアのイスラム文化を見ると、女

性が人前で歌ったり、ヒジャブも自分なりに着用していたり、アイランドの雰囲気と相まってめっちゃチャルだった。日本に来て目にしたイランとの違いというのももちろん大きくて、日本は技術的に進んでいながら、自分たちのカルチャーやヘリテージを守っているこ



パルディースさんお手製の「ショレザルド」は、イランの伝統的なライスプリン。サフランの黄色、バラやナッツの装飾が特徴的。

とを美しいと感じました。イランも歴史のある国ですし、伝統的な模様を現代的に尖らせて未来を表現できる可能性もあります。既存の価値観に縛られることなく伝統的なイランと未来とを融合させる表現ができれば、すごく面白いのではないかと考えています」

現在は、卒業・修了作品展に向けて制作を進めている。自分のアイデンティティとは何によって裏付けられるのか。公的な規定と自己表現との関係とは。イランと日本での個人的な体験を起点に、写真、映像、アーティストブックなどを用いたインスタレーション作品を構想している。シリアスに抵抗

の声を上げるだけではなく、ユーモアを交え、意思を共有できる仲間を増やせるような作品に期待が高まる。「いまはギャラリーでアルバイトをしてアートシンのことも学んでいて、アンダーグラウンドシンの面白い作家たちとの出会いもあって、多くのインスピレーションを得ています。GAP修了後には、日本でも暮らしたいし、他の場所にも行ってみたいし、イランに帰りたいと思うようになるかもしれない。時間をかけて実験的なパフォーマンスアートを続けたい気持ちはありますが、目指す先をまだ固めたくはなくて、ただ、自分に嘘をつかないように暮らしていきたいと思っています」

Julia Evelyn Hill / 2000年オーストラリア・クイーンズランド州生まれ。オーストラリアン・ユース・オーケストラ、DEEPBLUEオーケストラなどで演奏活動を行う。22年、オーストラリア政府のニュー・コロombo・プラン奨学生として山梨学院大学に留学。同年には、オーストラリアン・ユース・オーケストラのリチャード・ボレット記念賞を受賞。26年より、東京藝術大学大学院音楽研究科器楽専攻（ヴァイオリン）修士課程に在籍。

オーストラリア出身
大学院音楽研究科
器楽専攻（ヴァイオリン）修士1年
ジュリア・ヒルさん





「アジアに留学するのなら、どの国がいいと思いますか？」

オーストラリアの名門グリフィス大学クイーンズランド音楽学校でヴァイオリンを専攻していたジュリアさんは、オーストラリア政府が主宰するアジアへの留学を支援するニュー・コロネボ・プランという奨学金制度を知

り、大学の先生にそう尋ねた。そして、勧められた国が日本だった。

「調べてみるとクラシックからJ・P・O・P、ロック、伝統音楽まであって、いろいろな音楽文化が存在する国として興味を持ちました」
留学先は山梨学院大学だった。7歳でヴァイオリンを始め、音楽にすべてを費やしてき

尺八を吹くときには、自分の身体のどこに感情が生まれているかを意識し、そこから音を出すようにすることが重要だという。

た彼女にとって、音楽大学ではない同学への留学経験は、人生の大きな転機となったという。

「日本文化のコースを受講して、合気道や柔道、修験道、尺八などの伝統音楽といった多様なジャンルを学びました。もう『日本最高!』となった(笑)。オーストラリアの大学で卒業論文を書く年だったので尺八を

テーマに選んだのですが、その留学期間で価値観やいろいろな考え方が変わりました。それまでは、良い評価をもらうためにひたすらヴァイオリンを練習していましたが、それだけでは視野が狭いことに気付かされたのです。東洋的な考え方だと、全身で外の世界とつながって、楽器を通してそこで生まれる感情や自分を取り囲む自然の力などを表現する。とても神聖な演奏姿勢を学びました」

東洋哲学に根ざした音の探究

そのきっかけとなったのが、修験道の授業だ。剣道を通してスポーツ心理学を研究し、そこから東洋哲学へと関心を広げ、修行を経

て自身が山伏となり、修験道を各地の大学で教える長谷川智氏との出会いから多くを学んだ。ジュリアさんは実際に山に入り、滝行を経験するほどに傾倒したという。

「それまで自分にとって、楽器を演奏するときの中心は『私』でした。でも、長谷川先生から修験道について学ぶと、そうではなく、ヴァイオリンを演奏する私は管のようなもの、架け橋のようなものであり、作曲家の世界や天国のような世界を自分の演奏を通して聴く人に伝えることが大切だと気付きました。人間の経験や感情をシェアすることが、自分が演奏をする目的に変わりました」

その長谷川氏を通して、「奇跡のようなご縁」があった。ヴァイオリニストであり、東京藝術大学で教鞭をとる植村太郎准教授と知り合うことになったのだ。修験道とヴァイオリンを日本で学びたいと考え、山梨学院大学での留学を終えてオーストラリアで1年過ごしたのち、藝大の大学院でヴァイオリンを専攻することになった。

「修験道にも詳しい太郎先生からヴァイオリンを教わるために、絶対に藝大に留学したい

と思いました。長谷川先生と太郎先生が山梨で行った合宿に昨日（8月下旬）まで参加していたのですが、初日はヴァイオリンのレッスンを受けて、次の日からは、自分自身の身体の扱い方を学ぶナンバ式骨体操であったり、呼吸とポーズと瞑想を組み合わせてエネルギーのバランスを整えるチャクラレーニングであったり、長谷川先生のボディワークのレッスンが始まります。その合間にヴァイオリンのレッスンもあって、最終日にはみんなでコンサートを行いました。まさに私が求めるプログラムです（笑）」

日本での学びを次世代の教育に

現在は修士課程1年目だが、2年次の末に提出する修士論文では東洋的なテクニクについて研究し、ほかの学生や、長谷川氏、植村准教授にインタビューを行うことで、その多角的な分析を目指しているという。修験道を通して自分の身体と宇宙との関係を学び、身体を通して音を出すことの意義を考察し、音楽を演奏することの目的を捉え直した経験がジュリアさんの大きな原動力となっている。

「日本での経験を通して、私のマインドセットは大きく変わりました。本当にポジティブな方向に。クラシック音楽を学ぶオーストラリアの音大生には、演奏するときにすごく大きなストレスを感じている学生たちがいます。楽譜を完璧に理解しないといけない。正しく、うまく弾かないといけない。試験のため、オーディションのためにだけ音楽をやっているせいで、ストレスを感じてしまうのだと思います。音楽は人間のエモーションを表現し、自然のエネルギーをシェアするためのものだということを学べたら、ストレスなく音楽に向き合うことができます。藝大の修士課程でスタートした研究をいずれ教育に活用できるように発展させたいと思っています」

すでにジュリアさんは、オンラインでオーストラリアの学生に個人レッスンをしたり、長谷川氏と植村准教授が主宰する合宿にオーストラリアの学生を招いたり、その試みをスタートさせている。オーケストラや自主公演などで音楽家としての表現を続け、その実力を高めながら、教育者としての視点を育む彼女の研究成果を楽しみにしたい。



中国出身

大学院映像研究科アニメーション専攻
2020年修了

羅絲佳さん

ラ・シカ／1993年中国・広東省生まれ。
2015年に四川美術学院を卒業し、17年
から20年まで東京藝術大学大学院映像
研究科アニメーション専攻に在籍。日本
と中国を中心に、各地でグループ展や映
画祭に参加。新千歳空港国際アニメー
ション映画祭で審査員を務めたほか、26年
には女子美術大学で非常勤講師も務めた。
この写真は修了作品『私はモチーフ』を投影して
撮影。本作はYouTubeで
視聴できる→



2020年3月に藝大の大学院を修了し、

現在はアニメーション作家として活動が続ける羅さん。子どもの頃から絵を描くことに親しんできた羅さんをアニメーションの道へと誘ったのは、高校時代に先輩から借りて見た実験アニメーションの作品集だった。カナダで活躍したノーマン・マクラーレン、スイスのジョルジュ・シュヴァイツァーベルなど先人たちの作品に圧倒されたという。

「高校の頃にロックを聴き始め、音楽がすごく好きになっていたので、音楽と結びついたアニメーション表現をしたいと漠然と考えていた記憶があります」

高校時代には、欧米のロックバンドのみではなく、日本の椎名林檎や平沢進、戸川純などにも夢中になり、大学では、日本のサブカルチャーへの関心も深め、『ガロ』系の漫画作品なども読み漁った。そして、中国の大学であまり満足できなかったこともあり、卒業後には日本への留学を考えた。両親に反対されたために就職し、1年弱、中国のゲームメーカーで働いてみたが、やはり諦めきれずに両親を説得して留学を決めた。藝大の映像研

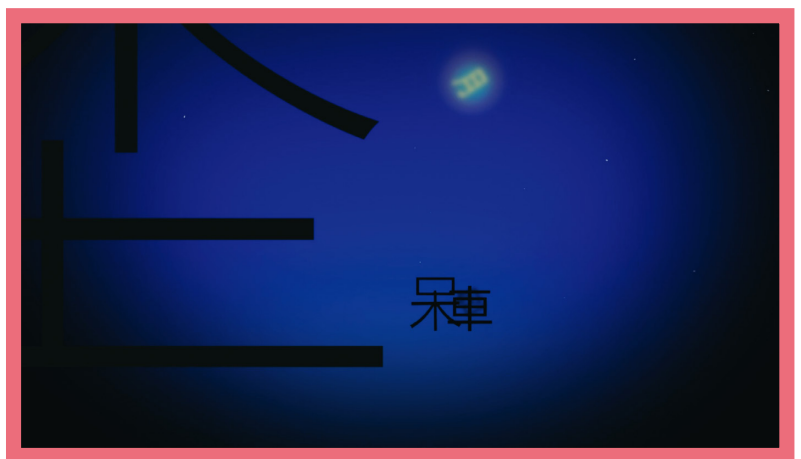
究科を選んだ理由についてこう話す。

「先輩から借りた実験アニメーションの作品集に、藝大で教えている山村浩二先生の作品が入っていて、とても魅力的だったことがひとつのきっかけです。実際に入学したら国際交流もありましたし、施設もとても整備されていて、音楽など各領域のすばらしい先生とも出会えて本当に期待通りでした。何よりも日本や世界各地から集まった、アニメーションを本気でやっていきたいというクラスメイトに囲まれた環境がすばらしかったです」

授業内容は、音楽とアニメーションを組み合わせた表現を目指す羅さんの創作意欲を十二分に満足させてくれるものだったという。

音楽構造から映し出す人間の対話

「1年次に音楽史と映像音楽論の授業があったのですが、音楽家で著述家でもある岸野雄一先生が授業をされていて、映画のなかのワンシーンを見ながら音楽を分析したり、ルネサンスやバロックの時代から現代までの音楽史を学べたり、すごく面白くて深い内容でした。山村先生の課題もすごく印象に残っていた。



『Burger Satiation』(2024)。中国語でハンバーガーを意味する「漢堡」など、漢字そのものをキャラクターとして動かした作品。

ます。自分のスマートフォンの音楽アプリに入っている音源をシャッフルして、ランダムに出てきた曲のタイトルをテーマに、自分のアニメーションをつくるという課題です。知識を得られるだけではなく、私たちの発想

力を鍛える課題と授業ばかりでした」

修了制作として、『私はモチーフ』という作品を手がけた。バツハのフーガを聴き、モチーフとなる短いメロディが、追いかけるように重なっていく構造に興味を持ったことがきっかけとなった。「モチーフがひとつの存在に、人間や生き物のように意識を持っている存在に見えたんです」と羅さんは話す。「例えば3つの声部（パート）で構成されたフーガ曲など、タイミングをずらしながらモチーフが展開していく。そのように人間同士が関わり合えたら、面白いのではないかと想像したんですね。それで、3つの声部をそれぞれひとつのキャラクターとして考え、曲が展開するにつれて、音と動きがシンクロしていくようなアニメーションを目指しました。3つのキャラクターの対話を脚本に書いて自分の声で演じ、音楽をビジュライズする物語にしたのです」

アニメーションで拓く多様な視界

大学院を修了したのが2020年3月。コロナ禍で外出を規制されるなど、苦勞した

点もあったが、オンラインでの映画祭への作品応募などを続けながら、アニメーション作家としてのキャリアを築いてきた。ミュージックビデオやイベントのプロモーション映像などの依頼仕事も受けながら、1〜2年に1本のペースで作品を手がけている。



彼女のバイブルは、大きな影響を受けた日本のアニメーション作家・今敏の『KON'S TONE「千年女優」への道』の中国語版。

することだと考えています」

中国で開催される映画祭に出品する機会も増え、また、最近ではチベットのバンドのツアーで使用するステージ映像を依頼されるなど、中国にも定期的に通う機会があり、「自分の世界に閉じこもって制作するだけでなく、人と触れ合って刺激を受けながら、

大袈裟な言い方かもしれないけど、日本と中国との架け橋のような役割を担えたら」という思いもある。その媒介として、アニメーションに大きな可能性を感じているのだという。「アニメーションというのは、固定したキャラクターやひとつの世界観にとらわれず、その動きや絵自体によってメッセージを伝えられるメディアアだと思っています。私は多分、

人間中心の考えが好きではないこともあって、アニメズミ的な世界観をアニメーションで表現してきたのかもしれない。そうやってアニメーションを通じて、ひとつだけとは限らない世界を見る方法を提示していけたらいいなと思っています」

歴史編

より広い世界を知りたい。自由に創作したい。
自分のために、人々のために学びを究めたい。
芸術は夢であり、国の希望だった。そんな時代の
留学生たちの足跡を、東アジア諸国を中心に振り返る。

美術の近代化で、国の発展を。

東京美術学校に学んだ中国人留学生たち

留学という言葉の歴史は古く、8世紀末の史書『続日本紀』で、亡くなった高官の業績

として〈従使入唐、留学受業〉（遣唐使に随行して唐に渡り、その地に留まり教えを受け技術を学んだ）と記されたのが始まりとされている。1200年以上前から外国に赴いて学ぶことが、日本と多くの国々との間で行われ、そうして得た学術や技術、およびその交流が文明を発展させてきた。

翻って、近代では明治維新後、多くの人々が海を渡り、西洋で発達した社会制度や文化を吸収して国に持ち帰った。東京藝術大学の前身である東京美術学校と東京音楽学校も、そうした時代に西洋芸術の移入を促し、また

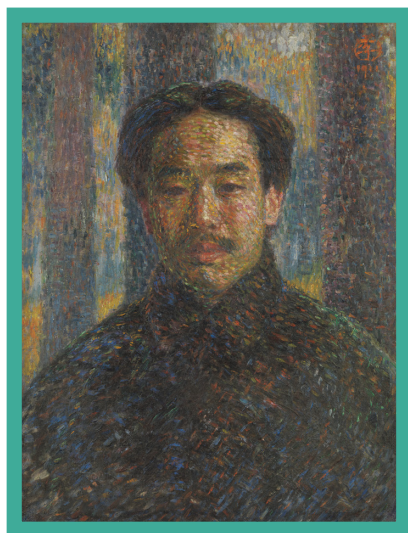
日本独自の文化の発展を担うために設立された教育機関である。

その学校を目指し、やがて周辺の国々、とくに日本を取り巻く東アジア各国から留学生たちがやってくる。多くの学生が法学や政治学、経済学を学ぼうとしたなかで、数としては少数ながら、日本を通して西欧の芸術に触れ、それを体得しようとする人々がいた。

1887（明治20）年に開校した東京美術学校と東京音楽学校、その門を叩いた留学生たちのなかでもっとも多かったのが、中国大陸からの学生たちである。

「中国人留学生の数は、日本全体で1905（明治38）年ごろから急激に増えはじめ、す

ぐに1万人を突破。当時の中国は清王朝の末期。長く行われてきた官僚登用の試験制度である科挙が廃止され、それに代わる「洋科挙」として、海外留学がひとつの旗印になっ



李叔同（日本留学時の名は「李岸」）の卒業制作。《自画像》1911年／キャンバス・油彩／東京藝術大学大学美術館所蔵



11-1
胡根天（胡毓桂）（1892-1965）

自画像

大正9年（1920）
キャンバス、油彩

HU GENTIAN 1892-1965
Self-Portrait

1920
Oil on canvas

胡根天（胡毓桂）の卒業制作。日本に残る
唯一の作品。《自画像》1920年／キャン
バス・油彩／東京藝術大学大学美術館所蔵
（『藝大式 美術の“ミカタ” —この夏、藝大
生になる—』展にて撮影）

たようです。もちろん、美術を学びにヨーロッパへ留学する学生もいましたが、日本は距離的に近く、生活習慣においても近い点が多い。そのメリットは大きかったかなと思います」

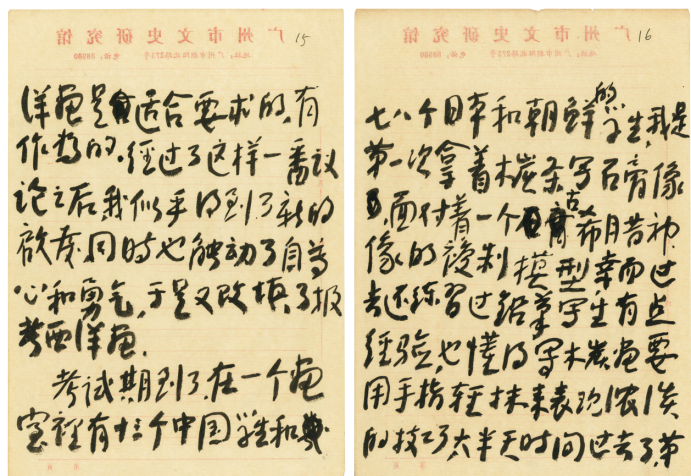
そう話すのは、美術学部先端芸術表現科の牛島大悟准教授。メディアとサウンドの両領域で作品制作を行う美術家として2008年から14年に中国を拠点に活動した経験もあり、芸術分野の留学生たちの歴史に関心を寄せるようになった。2023年度、東京藝術大学未来創造継承センターの芸術資源活用プロジェクトへの採択をきっかけに、大学史関連資料をもとに東京美術学校の中国人留学生たちの活動について調査を開始。その後も研究を継続し、24年には『東京藝術大学と中国人留学生』と題した展覧会、25年には同題の音楽会を開催している。

最初の卒業生はスーパースター

藝大美術学部における初期留学生の全体像を示した研究成果が、故・吉田千鶴子の残した『近代東アジア美術留学生の研究―東京美

術学校留学生資料―』（ゆまに書房・2009年刊）。そこには、開校から1952（昭和27）年の閉校までの65年間に東京美術学校が送り出した239人の留学生の入学から卒業まで、そして追いついた限りの来歴と、その

後の動向が記されている。吉田研究によると、全留学生のなかで、中国人留学生は最多の103人。全時期を通じて志望者が集中したのは、日本が明治初期に先んじて西洋に学び、技術を導入していた



【日本語訳】……西洋画は、日本のほうが中国より進んでいる。日本に来て西洋画を学ぶのは、時代の求めにもなっており、将来性のあることだ。そうした議論を経て、私は何か新たに気づかされたように思い、同時に自尊心を刺激され、勇気をかき立てられた。そこで、志望を西洋画科に改めて出願した。

試験の時期が来た。ある画室には中国人学生が十三人、日本人と朝鮮の学生が七、八人いた。私は初めて木炭を手に取り、石膏像を描いた。古代ギリシャの神像の複製を前にして、幸いにも以前に鉛筆デッサンを練習したことがあり、木炭デッサンでは指で軽くこすって濃淡を出すやり方も多少はわかっていた。半日ほどで描き上げ、その場に提出して、結果を待った。……胡根天『芸圖耕耘録』より

1980年代、最晩年の胡根天が綴った東京美術学校受験時の回想。提供＝胡宇清



1922年、自身が開いた広州市市立美術学校の校舎前で学生たちと。東京美術学校は男子校だったが、胡根天は女子学生にも広く門戸を開いていた。提供＝胡宇清

西洋画科だった。牛島准教授が開催した2024年の展覧会では、東京美術学校西洋画科における中国人初の卒業生で、中国近代美術の先駆者のひとりとされる李叔同^{リシュートン}の作品と生涯にスポットを当てた。

「天津の裕福な家庭に育った彼は、1906（明治39）年に来日。当時の留学生たちと同じように、座学を受講する必要のない選科生として入学し、黒田清輝のもとで学びました。彼は非常に多才な人で、在学中はほかの留学生たちと結社をつくったり、劇団を結成して『椿姫』を上演して自ら舞台に立ったり。東京音楽学校

ともつながりがあったようで、帰国後、日本留学中に親しんだ『旅愁』のメロディに中国語の歌詞をつけた『送別』をつくった。中国では教科書に載っているほど有名な曲で、中国人なら誰もが知っています」

李叔同は帰国後、美術や音楽の教育に携わったのち、1918（大正7）年に杭州で出家。その後は弘一^{コウイチ}と号して仏教の戒律研究と実践に力を注いで中国を代表する高僧となる。出家時にそれまで所有していた絵画の多くを手放したとされており、藝大の大学美術館に残された卒業制作の自画像は、今や貴重な歴史的史料となっている。

一方、東京美術学校での学びを教育で社会

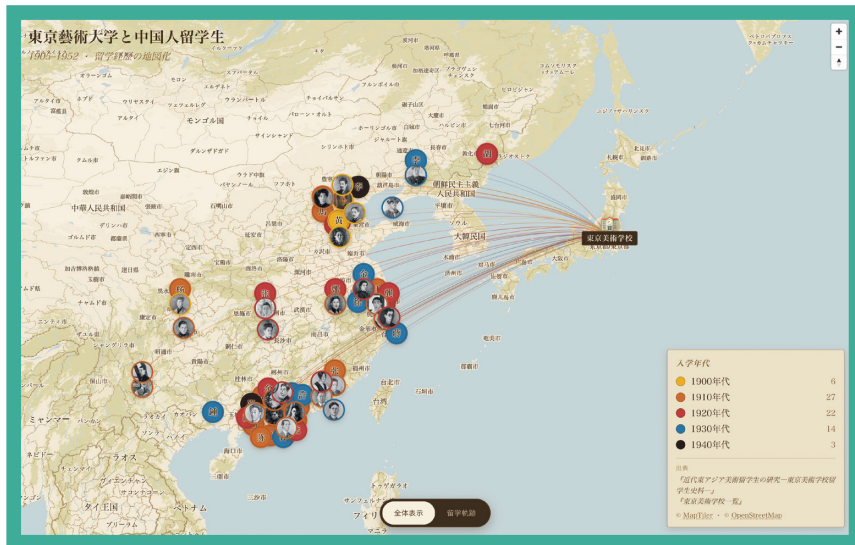
に還元した留学生もいる。牛島准教授が現在、プロジェクトの第3弾として11月に開催する展覧会^{*2}で足取りを追うのが、1915（大正4）年に同じく西洋画科に入学した胡根天^{フケンテン}だ。「画家としてはもちろん、美術教育の分野で名を残した人。注目すべきは、在学中に中国人留学生の画家たちを集めて中華美術協会を結成し、活動したことです。帰国後の1922（大正11）年には広州に美術学校を開いて多くの芸術家を育てることになります。協会のメンバーのなかにも教育者になった人が数多くいます」

明治開国初期、日本から海外に渡った人々



70代と思われる胡根天。中華人民共和国では広州市博物館館長、広州市文史研究館館長などの要職を歴任した。提供＝胡宇清

牛島准教授作成のデジタルアーカイブより。1905（明治38）年から
46（昭和21）年までの東京美術学校中国人留学生の動向を地図に可視化。



がそうであったように、当時の留学生の目的は、自国にはない文化や技術を、ひとつでも多く国に持ち帰ること。絵画などの技術を向

上させたいという以上に、自国の発展に寄与したいという彼らの高い使命感がうかがえる。しかし、1930年代に入ると、徐々に世の中に戦争の気配が漂い、留学生たちの学びの環境にも影響がしのび寄る。

戦争が閉ざした交流の途

先出の吉田研究によると、1930（昭和5）年まではほぼ毎年、コンスタントに2〜5人ほどの留学生が入学していたが、満州事変が勃発した31（昭和6）年以降は数が減り、入学者ゼロの年が続く。その後は休学、帰国、除籍や退学が増加し、ついには全員が帰国。戦後の活動が記載されている学生もいるが、一切不明も少なくない。

「在籍簿に名前はあっても、卒業制作をつくっていない人もいるし、中退者も多い。その背景には政治的、経済的なさまざまな事情があったと考えられます」と牛島准教授。卒業した留学生たちにとっても、日本との関わりは陰を落としたようだ。胡根天が開いた美術学校は、38（昭和13）年、日本軍の広東省上陸により閉校を余儀なくされ、彼自身の制作

も、西洋画を中心としたものから、晩年には中国画や書など、東アジアの伝統的な表現へと重心を移していく。

昨年、展覧会に向けての情報収集のため広州市を訪れた牛島准教授。現地でも進む胡根天の業績研究から多くの発見があったという。「彼は文章も多数残っていて、戦争前後には『日本は中国のゆりかごで育った国である』といった内容の論文を発表していた。もちろん、日中戦争の間はプロパガンダにも協力はしていたようです。それでも、亡くなる直前の1980年代には、日本で学んだことや暮らしの様子をメモに残していて、それが昨年、回顧録として出版されていました」

西洋画を日本で学ぶことの意義を感じたこと。東京美術学校の入学試験で、はじめて木炭画に挑戦したこと。メモの一端（↓P14右下）からは、未知の体験に胸を高鳴らせる若き日の様子や、学ぶことの喜びが伝わってくる。歴史に「もし」はないが、それでも想像してしまう。もし戦争が起らなかったら、彼と日本の文化を通じた交流はどんなふうに進み、実を結んでいただろうか？

先達から受け継いだバトンを、未来へ

「近年、中国の若い研究者の方々も留学生の歴史に興味を持ちはじめたようで、こちらの研究への質問や問い合わせも増えていきます」と牛島准教授。11月から開催する展覧会の準備を進める一方、未来創造継承センターの大学史料室（旧制東京美術学校部門）の協力を得つつ中国の若い世代の研究者とも交流し、中国人留学生についての研究を続けている。

「今、関心を寄せているのは、1980年代から90年代にかけて藝大に來日した留学生。これまでも何人かにインタビュする機会がありました。当時、中国で手に入る西洋美術の情報ほとんどは、やはり日本経由のものだったそうです。中国国内の政治、社会情勢が揺れ動いた時期でしたから、海外へ留学することにも今とは違った覚悟があったんだろうなと……。インターネットが普及した2000年代以降、あらゆる意味で地域の壁を感じない時代になってからの留学生とは、そのあたりの感覚は大きく違いますね」

こうした研究に、学部・学部の垣根を越え、音楽

学部からも現役の中国人留学生や研究者たち（↓P24）が参加しているのも、心強い傾向だ。過去を振り返るだけでなく、現在、そして未来につなげる試みが続く。

牛島准教授が展覧会に向けてつくった、あるデジタルアーカイブを見せてもらった。モニターに映るのは、中国大陸と日本の地図。吉田研究のデータに基づき、留学生たちがどの地域から東京美術学校にやってきて、いつ帰っていったか、その後、どこで活動したかという軌跡をマップ化し、さらに年代を選択しながら、留学生たちの動向をインタラクティブにたどることができる。現状は東京美術

学校が閉校した1950年代初期までだが、ここに、ゆくゆくは現在美術学部、音楽学部在籍する192名も含めてすべての留学生の動向と、彼らの活動や作品の情報を集約してプラットフォーム化したいという。

「もともとは過去の歴史を調べて、それを今の留学生たちの交流につなげたいという動機でした。多くの留学生が藝大で学んできた、そのバトンを次世代につなげていく、そんな思いを持ってほしいと思っています」

*1 幅広い芸術作品を、その創造の過程も含めて保存・継承し、社会へ開くクリエイティブ・アーカイブとして東京藝術大学内に2022年に創設。

*2 『東京藝術大学と中国人留学生』胡根天から現代まで展（↓P38）



美術学部先端芸術表現科准教授

牛島大悟

うしじま・だいご／1979年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。2004-05年、ドイツ・カールスルーエ造形大学へ留学。08年、文化庁新進芸術家海外研修制度により中国へ。11年まで北京電影学院新媒体芸術科研究員、14年まで中国美术学院インターメディアアート科講師を務める。先端芸術表現科教育研究助手、芸術情報センター助教などを経て現職。専門はデジタル技術とサウンド表現。

朝鮮半島の近代美術を拓いた留学生たち。 支配、被支配の歴史を、作品は超えていく

東京美術学校時代、中国に次いで数が多かったのが、朝鮮半島からの留学生たちだった。その歴史の始まりこそ中国より遅れるものの、1908（明治41）年以降、西洋画科を中心に日本画、彫刻、図案科（現在のデザイン科）に合計89人が入学している。

「実は、藝大の留学生研究が始まったのは、朝鮮半島出身の学生たちからなんです」

美術学部芸術学科出身で大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻（以下GAP）の李美那教授は、そう話す。示したパンフレットの表紙には『東京美術学校 43の顔』とのタイトルが（↓P20中）。これは東京美術学校の韓国留学生が描いた自画像の展覧会で、藝大で留学生研究が本格的に始まる前の89（平成元）年、在韓日本大使館関連施設のギャラリーで開催されたものである。「工芸史がご専門で韓国のご研究者とも親しかった中野政樹先生^{*}の尽力だったと聞いていま

す。朝鮮半島は明治時代の終わりに日本の植民地になり、第二次世界大戦後は南北分断、韓国では軍事政権の時代が長く続きました。しかし、80年の光州事件をきっかけに民主化への流れが加速。民主化宣言ののち、88年のソウルオリンピック

の開催で、国の名が世界に広まった。同時に経済発展が進んだこともあって、90年代を前にして自分の国をあらためて捉え、考える機会を持ったんです。近代化とは、自分たちのことを自分たちで決めるということ。そうして植民地時代を含む近代の歴史や文化への認識がある意味、肯定的に高まり、近代美術の見直しも進んでいったのだと思います」

対照的な自意識を示した2人の天才

その象徴が、韓国近代絵画を網羅した初の全集『韓国近代繪畫選集』の出版。全27巻のうち14巻が西洋画で、第1巻の巻頭を飾るの

高義東の《自画像》（東京藝術大学大学美術館所蔵）が収録された『韓国近代繪畫選集』第1巻は「初期」。韓国西洋絵画の草分けとされる作品の数々が収録されている。





金観鎬の代表作《夕ぐれ》(左)と《自画像》
(右)。ともに1915年制作。キャンバス・
油彩／東京藝術大学大学美術館所蔵

留学翌年の10(明治43)年には韓国併合により母国は日本の統治下に置かれることに。高義東の身分も、国からの派遣ではなく私費留学生に変わった。そんな彼が卒業制作として描いたのは、民族衣装に高位の文官や知識人が身につける程子冠をかぶった自身の姿。そこから、彼の主張が読み取れるという。

「自分がどういう存在としてこの国にやってきたのか。当時の卒業制作が大学に買い上げられていたことを考えても、こうした自分の姿を描いたのには、

が、朝鮮人留学生として東京美術学校西洋画科に最初に入学した高義東の作品。1909(明治42)年に入学し15(大正4)年に卒業した彼が卒業制作として描いた自画像である。「彼は両班という貴族階級の出身で、フランス語を学んで大韓帝国の内部で通訳をしていました。しかし、日本によって大韓帝国の外交権が剥奪されるという政治的激変に直面し、美術の世界へと道を変える決意をします。そして、大韓帝国からの派遣の身分で東京美術学校にやってくるのです」

それなりの思いがあったのかと」

時期を同じくして留学していたのが、平壤出身の金観鎬。11(明治44)年に西洋画科に入学し、15(大正4)年に卒業した彼の自画像(上右)は、高義東とは対照的に、毛皮のコートに毛皮の帽子という西洋的近代人然とした姿である。もう1作の卒業制作《夕ぐれ》は、東京美術学校留学生による作品群のなかで、もっとも高く評価された作品のひとつ。日本で最初の官制美術展覧会である文部省美術展覧会(文展。現在の日展の前身)に入選する榮譽に浴した絵画は、《自画像》とともに先出の選集第1巻に収められている。

この時代の留学生らしく、2人は帰国後にそれぞれ絵画運動を起こすが、高義東は次第に西洋画から伝統絵画に転向する。

「おそらく時代的に難しい面もあったのだろうと思います。日本で西洋絵画を学んできたことと、画壇の形成のなかで西洋絵画を続けることのギャップ、植民地化された社会の複雑な状況下で、日本留学前に学んでいた伝統絵画に回帰していかざるを得なかったのかな」

戦後に大韓民国が成立してからは、朝鮮美

術協会会長などの職を歴任。晩年には政治家としても活動した。一方、金観鎬も後進の育成に務めたが、やがて画業を離れ、1959年に没したと伝えられる。

忘れられた、もう一方の滞在者たち

1990年代から韓国国内で再評価が高まった韓国近代美術。93年、静岡県立美術館の学芸員として東アジア諸国の近代西洋画の企画展に参画することになった李教授は、調査のために訪れた韓国で『韓国近代繪畫選集』を手にし、図版クレジットに「東京藝術大学所蔵」の表記を発見。そのことが、現在の留学生研究の契機になった。

「もともと私はセザンヌの研究者で、静岡県立美術館にロダン館をつくるということで公募に応じたんです。それが、東アジアの近代絵画展をやるから、韓国人のあなたが韓国担当ね、と。私は日本生まれの在日韓国人で、当時、韓国語は話せなかったのに。思えば、学生時代、朝鮮半島の美術は好きではあっても専攻しようとは思わなかった。特に近代はさほど自分に近いものではなく、さまざま



在韓日本大使館公報文化院シルクギャラリーでの展覧会パンフレット。留学生43人の自画像が並ぶ。東京藝術大学附属図書館所蔵

決して日本の物差しで測らないことなど、協議を重ねてさまざまな困難を乗り越え、実現させたのが、99年開催の『東アジア／絵画の近代―油画の誕生とその展開』（P22左上）。中国、韓国、日本、香港、台湾の東アジア5つの地域の近代西洋絵画が一堂に会した画期的な展覧会には、高義東の『自画像』と金観鎬の『夕ぐれ』も展示された。

「必要なことは作品が語ってくれるはずだから、何を読み取るかは見る人に委ねようという方針でした。前年には韓国で大規模な近代美術の回顧展があり、高義東などの作品への研究熱があらためて現地で高まって、藝大への問い合わせも増えてきた。それに対応しながら留学生の調査も活発になっていき、その後、時間をかけて現在の大学史料室の活動に至る道ができていきました」

李教授は2015年、神奈川県立近代美術館葉山館で日韓の近代美術をテーマにした展覧会を手がけている。『ふたたびの出会い 日韓近代美術家たちのまなざし―「朝鮮」で



大学院美術研究科
グローバルアートプラクティス専攻教授
李美那

リ・みな／1966年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部芸術学科西洋美術史専攻卒業、同大学院美術研究科修士課程芸術学専攻修了。93年より静岡県立美術館学芸員、2003年より神奈川県立近代美術館主任学芸員。18年、東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻准教授に就任、23年より現職。編書に『完本 ジャコメッティ手帖』Ⅰ・Ⅱ（矢内原伊作著、武田昭彦・菅野洋人・澤田直共編。みすず書房刊）がある。韓国近現代美術史学会、文化資源学会、日仏美術学会、美術史学会会員。

描く』で取り上げたのは、日本と朝鮮半島の画家たちの作品。そして、この展覧会でもうひとつ、新たな視点から両地域の近代美術を捉えた。

「日本の植民地時代、外地版の文展が朝鮮で行われていて、そこで審査員をしていたのは東京美術学校の教師たち。そして戦前戦中には、朝鮮半島に暮らしながら制作していた日本人画家がいたんです。でも、彼らの存在や業績は、日本の美術史の本にも韓国の本にも載っていないくて、まったく無視されていた。この展覧会で取り上げた日本人作家のひとりもそうでしたが、帰国してから朝鮮在住だっ

たということを誰にも言いませんでした。そのことが自分にとってデメリットにもなり得るという、複雑な思いがあったのでしょうか」

エンパシーをもって、真の交流拠点に

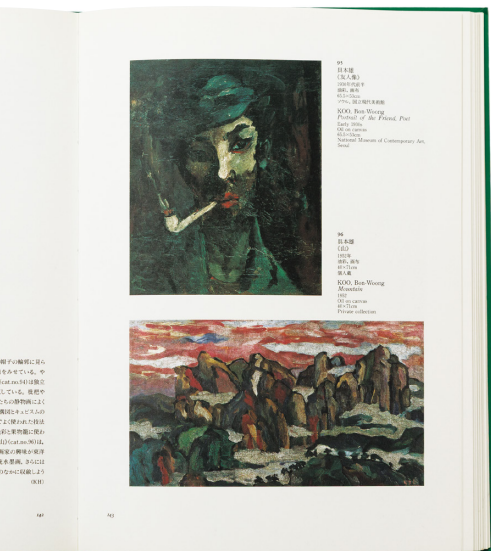
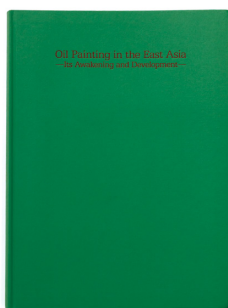
教える。教えられる。支配する。支配される。時代の流れ、そのときどきの状況によって、国や地域の関係は変化し、人々の立ち位置に影響を及ぼす。そこに、歴史を遡って事実を知る意味があると李教授は言う。

「東京美術学校の時代は日本の西洋化が先に進んでいたこともあって、東アジア諸国からの留学生に対しては、水が上から下に流れる

ように、教えてあげる」という態度でした。

しかも当時は、古代には相手の文明から学んでいたとしても今は劣っているのだと国が標榜していた時代です。留学生受け入れ開始時のそうした構造を知ることが、それが今はどうなのかを考えることにつながる。東京美術学校時代にかたちづくられた、一種、帝国主義的だった意識を、今の藝大はリノベートできているだろうか？ とくに、受け入れる側の我々教員と大学が、留学生をどう捉え、彼らとどういう意識で対面しているのか、自身を点検しなければならぬと思います」

李教授が所属するGAPは、日本で生まれ育った学生とはバックグラウンドを異にする学生の割合が高く、さらに政治的不安定さや思想統制のある国々からの留学生も多い。彼らにとって今の日本で学ぶメリットの第一は、自国と比べて相対的に表現の自由が保障されていること、そして、自分の居場所ではない出会えない人々やカルチャーに触れられる場であることだ。そうした人と人、文化の「交差点」としての役割が、今、あらためて藝大には求められていると、李教授は念を押す。



静岡県立美術館『東アジア／絵画の近代—
油画の誕生とその展開』の図録より。左上
は具本雄（クボヌン）の作品《友人像》。
具本雄は高義東が帰国後に発足させた高麗
画会に学んだひとりで、描かれた友人は詩
人の李箱（イサン。日本でも「翼」などの
作品が翻訳、出版されている）と伝わる。

「私たちが提供するのとは知識ではなくて、違
う文化を持った人とどう出会うか、その出会
い方。ときには、政治的に対立し、紛争状態
にある国や地域にルーツを持つ人たちが、同
じ教室で同じ課題に取り組むこともありま
す。そのとき、彼らが加害者と被害者のようにな

らないように問題設定をする。政治的なこと
は避けては通れないけれど、忘れてはならな
いのは、学生はそれぞれの国の代表者ではな
いということです。その国への批判が留学生
個人に対する批判にならないようにするため
に、どう環境をつくり、語りかけるか……な
かなかうまくはいきませんが、毎日毎日、考
え、話し合い、答えを探しています」

求められるのは、感情的に共鳴するシンパ
シーよりも、相手の価値観を想像し理解しよ
うとするエンパシー。より魅力的な交差点に
なるため、その第一歩として、数年前から
GAPはひとつの提案をしている。

「留学生を『国際学生』と呼びましょうよと。
外から一時的に来た人ではなく、一緒にこれ
からの藝大をつくっていく学生たち。彼らが
ここにいたこと、そして今いることによって、
大学がどう変わり、何を得るのか……そうし
た視点に立って、この先も留学生研究が進ん
でいくといいなと思っています」

*1 工芸史家。東京藝術大学美術学部芸術学科教授、のちに名誉教授。
2010年逝去。
*2 1980年、大韓民国全羅南道の光州市（現・全南光州特別市）
で発生した軍事政権に対する市民蜂起。



『ふたたびの出会い 日韓近代美術家のま
なざし—「朝鮮」で描く』（神奈川県立近
代美術館葉山館、2015年）図録より。留
学生や東京美術学校卒業生を含む朝鮮半島
作家の作品とともに、在朝鮮日本人作家の
作品を多数紹介。左上は西洋画科で高義東
を指導した藤島武二の作品。



欧米、東南アジア、ユーラシアからも。 東京美術学校で学んだ諸国学生の横顔

吉田千鶴子の先行研究『近代東アジア美術留学生の研究』(↓P14)によると、東京美術学校最初の留学生は、開校9年後の1896(明治29)年にドイツから来たワルテル・エルカン。鍍金科に選科生として入学し翌年には退学したが、帰国後、ベルリンで銅器を制作し、1904(明治37)年の米・セントルイス万博に出品するなど成功を収めた。

09(明治42)年までの中国、朝鮮を除く諸国からの留学生は初期留学生と呼ばれ、出身国はドイツ1名、イギリス1名、アメリカ3名、インド2名、現在のタイであるシャムから2名の9人。うち4名の女子学生が含まれる。

女子学生の多くは家族に帯同するなどして日本にやってきた短期留学生であったとみられるが、03(明治36)年に西洋画科選科に入学したマリー・イーストレーキは初の女性卒業生。アメリカ人の父と日本人の母をもつ彼女の入学は論争を呼んだものの、西洋画科教

授の黒田清輝の意見で許可され、最初の授業では学生たちがイーゼルに花を飾って歓迎したというほほえましいエピソードが伝えられている。ちなみに卒業成績は3人の同期選科生中トップ、在学中は柔道家・嘉納治五郎^{かのうじごろう}が開いた講道館で柔道も習っていたという。

女子、王族出身、東洋志向の学生も

また、09(明治42)年に入学したアメリカ人ハイエット・デリンジャーは日本画科選科に在学。受け入れ当初、学校側には何かしら西洋文化をもたらず人材として期待していた向きもあるが、彼女は東洋志向だったようで、このあたりがアジア諸国からの留学生と対照的。例えば、西洋美術は自国で学べるのだから、むべなるかな。このうち、女子学生の入学は、昭和初期に在籍したドイツ人の短期留学生を除いて、戦後を待つことになる。

05(明治38)年、漆工科選科に入学したモ

ム・チャオ・ポーン・プワナートと、同年、金工科選科に入学したチャルン・スラナートは、シャムのキングス・カレッジを卒業後、同国皇后の命により留学。ポーンは皇族の出身で、チャルンものに貴族に列せられ国の要職に就いたが、前出の吉田の著書には、兩人とも「東京美術学校で習った技術を一度も生かしたことはない」と記載されている。

05(明治38)年からは東アジア諸国の留学生が増加し、他の国々からの留学生が入学するのは1930年代半ば以降。インド、シャムに加え、ジャワ(インドネシア)、アフガニスタンからは国費留学生が工芸科彫金部選科に入学し、卒業している。また、アメリカからの留学生は34(昭和9)年に建築科に入学した大住龍太郎という日本名の学生1名で、カリフォルニア州出身、39(昭和14)年卒業。1940年代前半に活動していた同姓同名の翻訳者がいるが、彼との関連は不明である。



芸術の力で、国と人々の立て直しを。 東京音楽学校に学んだ中国人音楽家たち

さて、音楽学部の前身である東京音楽学校はどうだったのか。初期中国人留学生の研究に取り組んでいる若き研究者たちがいると聞き、会いに行った。郭君宇さんと倪雪さん。2人とも1990年代生まれで2018年に来日、藝大大学院に学び、現在は未来創造継承センターを拠点に研究に取り組んでいる。「子どもの頃から『名探偵コナン』が好きで、ぜひ日本に行きたかった」という郭さんが博士論文で取り上げたのは、中国人留学生として東京音楽学校にもっとも早い時期に入学した音楽教育者、曾志恣^{ソンジシ}。1879（明治12）年生まれで20世紀初頭を活動期とする彼は、郭さんにとっておよそ120年前の大先輩だ。「大学院に入学してすぐコロナ禍が始まり、研究活動ができないなかで当時の指導教授の塚原康子先生から大学史史料室の存在を教わりました。東京音楽学校の100年以上前の留学生にまつわる史料が残っていると聞き、

興味を持って……。中国の大学では曾志恣の名前は知られていたものの、日本での活動については伝わっていませんでした」（郭さん）

人文科学から芸術まで、貪欲に

江蘇省の裕福な家庭に生まれ、幼い頃から音楽に親しんでいた曾志恣が東京音楽学校選科に入学したのは1903（明治36）年。実際はその2年前に来日し、早稲田大学の予科と清国留学生の教育機関だった宏文学院で学んでいたという。早稲田大学では政治経済科で政治を専攻。音楽学生ではなかったのだ。「当時、音楽を専門に学びたい人はあまりおらず、法律や経済などを学びに来る人が多かったようです。日本にはさまざまな学科を短期間で学べる学校が多く、来日した学生に人氣があったといいます」（郭さん）

同時代の中国人留学生には『故郷』や『阿Q正伝』などの小説を残した魯迅^{ロジン}がいるが、

郭さんの研究成果をもとに牛島准教授が構成した。04（明治37）年の亜雅音楽会で演奏された曲を編曲し、中国伝統楽器と和楽器で合奏、また、1980年代から90年代にかけて藝大音楽学部で学んだ声楽家で、北京の中央音楽学院で教授を務めた王憲林^{ワンケンリン}氏の歌唱披露も。会場は卒業生や現役中国人留学生で大いににぎわった。大学院美術研究科先端芸術表現専攻で学んだ倪^ニさんも、先達の活動に惹かれたという。

「それまでの関心は現代的な表現だったので、中国への留学経験をお持ちの牛島先生から声をかけられ、お互いの文化をどう見ていたか、どんな交流があったのか、先輩たちの学びに興味を持って研究に加わりました。

歴史はまだ学んでいる最中ですが、曾志恣の活動した時代は、人々の生活を改善するツールとして芸術に注目することが珍しかったはず。影響はさておき、まずは挑戦したことがすばらしかったと思います」（倪さん）

精力的な活動を続けた曾志恣は、27（昭和2）年、48歳で逝去。その後、曾志恣とほぼ時を同じくして来日していた蕭友梅^{シャオヨウメイ}が、中国

近代音楽教育を担うひとりになっていく。東京音楽学校選科でピアノと唱歌を学び、並行して東京帝国大学（現・東京大学）文科大学哲学科に学んだ彼は、ドイツに留学。音楽理論や作曲のほか哲学、教育学を学び、ライプツィヒ大学で哲学博士号を取得した。その後、



蕭友梅。作曲家としても手腕をふるい、歌曲、ピアノ曲、管弦楽曲、合唱曲など100曲以上の楽曲を制作。論文も多数残した。

伝えるだけでなく、音楽を国や国民の精神的支柱になりうるものとして位置づけ、その普及を目指している印象も受ける。

「曾志恣の著作によると、当時の清国では、精神を養うために音楽を勉強すべきとされていたようです。音楽で心身を健康にし、教養

とエレガンスを身につける……落ち込んだ国民の心を支えるために音楽が必要という考え方だったのでしよう」（郭さん）

「そもそも当時、海外に留学できる人は基本的に家庭が裕福だった。けれど、国にいて自分たちだけがすばらしい生活を送るよりは、新しいものを学んで、周りの状況を改善したいという気持ちを持っていたのだと思います。日本だけでなく、欧米へ

行って新しい制度や活動に触れるたびに、これを中国でも実現できたらと」（倪さん）

蕭友梅が日本を去ったのちに日中戦争が勃発。さらに彼亡き後の第二次世界大戦後、中国国内の政治、社会体制の変化など、歴史的に厳しい時期が数々訪れる。それでも、芸術



未来創造継承センター 大学史料室
(旧制東京音楽学校部門) 教育研究助手

郭君宇

カク・クンウ／1996年中国・山西省生まれ。
華南理工大学芸術学部卒業後、2018年に
来日。19年、東京藝術大学大学院音楽研
究科研究生として入学。26年同博士課程
修了。専攻は音楽学（中国近現代音楽史、
日中音楽交流史）。26年4月より現職。



未来創造継承センター
特任研究員

俣雪

ゲイ・セツ／1994年中国・貴州省生まれ。
大連外国語大学卒業。2020年、東京藝術
大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修
士課程に入学。修了後、未来創造継承セン
ターに教育研究助手として参加、24年よ
り現職。専門はデジタルアーカイブ。

を志す仲間としての交流は現代へとつながった。2026年、全学部・学科留学生252人のうち最大多数を占める160人の中国人留学生たちが、それぞれの分野で学び、郭さんや俣さんがこうして研究を続けている。

展覧会や作品を通して、互いを知る

「中国からの留学生は、今は美術のほうが多^{*2}数。美術には美術スタイルの交流があり、音楽もそうなので、私たちのような交流は例外的かも（笑）。でも、展覧会や音楽会を通じて、少しずつ広がっていき……。自分の活動で

も、日本と中国の比較研究をしようと思っています。たとえばAIをツールとして、同じ作品について日本人と中国人がそれぞれどんなところに注目しているのか？ 共通点と相違点がわかれば、お互いに作品や文化をよりわかりやすく伝えられるかもしれません。そんな研究を通して、私も相互理解に貢献できたらなと思っています」（俣さん）

「まずは中国人留学生の日本での活動についてさらに研究を進め、将来、帰国した際には、この興味深い歴史を多くの人に伝えたいと考えています。まだ未定ですが、音楽会も、また企画できたらと」（郭さん）

2人はそれぞれ、中国にいるさらに若い世代の学生たちから「藝大ってどんなところ？」と尋ねられることがあるという。

「中国にいた頃、身近にいた藝大出身の中国人の先生が憧れや誇りを持って藝大のことを語っていたので、私もいいイメージをずっと持っていました」と俣さん。これからも、すべての留学生にとって誇りを持って語れる場所であり続けたい。

*1 1894-95年。勝利した日本は三国干渉を受けるも台湾などを領有。欧州列強の租借地も増えることとなり、中国国内の不安定化が進んだ。

*2 美術学部・大学院美術研究科74名、音楽学部・大学院音楽研究科は32名。ほかに大学院映像研究科46名、大学院国際芸術創造研究科8名。（大学概要2026より）

工芸史研究室
卒論演習

目を凝らし
心を研ぎ澄ませて。
歴史は観察に始まり
観察で広がる



子どもの頃から「絵本を眺めるように」韓国陶磁を愛でていたという片山教授。博士1名、修士5名、学部2名の頼れる相談相手。

「もの」から時代と制作者の息吹を

たとえばレストランに行つて、その店の名前がついたスペシャルティがあるならば、やはり注文したくなるもの。そうした意味で、魅力的だと思いませんか？ 東京藝術大学の芸術学科。つまり、芸術オブ芸術。訪問先多数につき、今回は枕(?)は短め。どんどん行きます。

まず訪れたのは、工芸史研究室。芸術学科では学部3年次に4つの分野から選択し専攻するが、そのひとつの工芸史研究室は現在、韓国陶磁史を専門とする片山まび教授のもとで日本と東洋の工芸を学ぶ。今回は学部4年と修士課程の学生たちが卒業・修了論文のために東京藝術大学美術

授業 SANKAN

理論あつてのアカデミア。
芸術大学で芸術を学ぶということ
美術学部芸術学科

絵を描き、作品をつくり、音楽を奏で、生み出す。数々の実技に加え、藝大には理論と歴史を究める科があります。その名も、美術学部芸術学科。伝統の美学、美術史に加え、ジャンルの枠に収まらないニュータイプの研究まで。「芸術とは？」は、それほど奥深く、魅惑的な問いなのです。

挿絵＝小柳景義 文＝大谷道子

芸術学



館で行う調査に同行させてもらうことに。調査、すなわち美術品の実物を見て、つぶさに観察する授業である。

「今回は、大学における研究の出口の部分なんですよね。本当なら、入り口の部分も見たいだけ」といいますが」と片山教授。柔和な表情にホッとする。なぜなら、参加前に聞いていた注意事項が、なかなか詳細だったから。「手を洗う」

「爪を切る。マニキュア禁止」「装飾のない服、靴紐のない靴で」「アクセサリー、時計類は外す」「走らない」等々。もちろん、これらは美術品と接するときの最低限のマナーであり当然のルール。取材班も、お互いに指差し点検して臨みます。

今回の調査対象は、日本近代の茶釜4点、平安時代の和鏡3点。見慣れない長方体の陶器は、中国・華北地域で10〜12世紀頃に生産されていた

集中



オリジナル道具も駆使しての調査。(右ページ下) 和鏡の表面を観察する顕微鏡は、実は肌のキメや毛根を観察する美容用！

磁州窯の枕(陶器製。人の一生はほんの少しうたた寝している間の出来事に等しいという故事「邯鄲の夢」にもちなむ)だ。「皆さん、道具の準備を」との片山教授の合図で、ひとりひとりが対象物の前に座り(座る椅子にガタ付きがないかも入念に確認)、調査が始まった。

研究する「体をつくる」ところから

まずは、一点一点をじっくりと見て点検する。古物ゆえ、状態の変化などは学芸研究員からの聞き取りも含めて要チェック。

「作品の状態にもよりますが、手に持って手触りなどを覚えることも大事です。その点が絵画や彫刻の研究と違って……。バレエや日本舞踊に基礎レッスンが必要のように、工芸の研究者も、まずは研究する体をつくることから始める。そういう点で、少し似たところがあるかもしれません」(片山教授)

それからは、計測したり、表面の模様、刻印などをつぶさに観察したり。和鏡に当てている先が斜めの物差しは、当たりの柔らかな竹製。実はこれ、市販品をカスタマイズしたものだという。模様の表面をなぞるには、手づくりの紙繻も活躍。得たデータや印象は、紙に鉛筆書きで記していく。これは「調書」と呼ばれるもので、調査のポイントを書き出しておいた研究者用のノートなのだ。「現物を前にすると、どうしても舞い上がってしまいますから」と片山教授。推し作品を前にすれば、やっぱり上がりますよね。

大学院生は爾々と、学部生も精いっぱい目の前の対象に目を凝らし、タイムアップ。ものと、それをつくった先人たちへのリスペクトを込めた調査は、静かな礼で締めくくられた。歴史は観察、そしてそれを書き残していくことでつながっている。



く。そのことを実感する1時間あまり、充実の時間だった。

「若い年代から実物に触れることができるのは、やはり大学美術館があつてのこと。美術史研究に学術的に貢献することにつながっていく、調査はその第一歩です」(片山教授)



茶釜は内側、裏側まで入念に。写真のほか、調書に絵や図を描くことも。学芸研究員の方々の手も借りて、時間を有効に使う。

美学研究室 美学演習1

これぞ座学！

先人の思考と真摯に向き合う 至福の文献講読

とにかくゆっくり、繰り返し

さて、続いては美学研究室の授業へ。美学の創始者は18世紀のドイツの哲学者バウムガルテンで、手元の辞書には「自然や芸術における美的感性



で、さらに一文一文について詳細に検討する。15行を読むのに1回ないし2回（つ

学生ひとりあたり15行ほどの原文を割り当て、それぞれが辞書を引きながら訳文を作成。それを読んで集まった学生たち

肝心なのは「とにかく、ゆっくり読む」こと。時間をかけて精読する。美学という哲学を学ぶ研究者にとって、もっとも基礎になるやり方です」

「ミケル・デュフレンヌという美学者の著書をフランス語で読みます。先人が書いたテキストを、時間をかけて精読する。美学という哲学を学ぶ研究者にとって、もっとも基礎になるやり方です」

的認識や、芸術の創造・享受などについて研究する学問」とある。専門科目の美学演習Ⅰは、20世紀フランス美学が専門の川瀬智之教授が担当。「要は原書講読。昔ながらの授業です」と語る。



手元にはぶ厚い紙の辞書が。川瀬教授の著書『東京藝大で教わるはじめての美学』（世界文化社）は、美学初心者にも最適。



まり1〜2週間）を要するというから、現代、重視されがちなタイムパフォーマンスは度外視である。

この日、教室には6人、プラス、リモート受講の学生が10人ほど。「先週のぶんがまだ途中だったと思うけれど、もう1回、訳文を全部読んでもらっていいですか」と川瀬教授が促すと、スピーカーから担当する学生の朗読が響いた。

今回（というか前回の授業から継続して）取り上げられたのは、課題図書であるデュフレンヌの『美的経験の現象学』の1章、日本語にすると「芸術作品一般の構造」のなかから、芸術作品における物質と素材の関係について述べた部分。音楽における音と楽器はその存在を明確に区分できるが、彫刻においてその素材である石を区分することはできるのかできないのか……拙い要約で恐縮だが、そのような内容を述べた箇所である。（彫刻の）物質と素材が密接に結びついているとき、それは音と同じほどの自律性（＝autonomie）と現実性（＝réalité）を有しない



と訳されているが、自律性は理解できるとして、現実性は何を意味しているのか」

「自分では『実在性』と訳しました。音と同じほどの実在性をもたない」と

「なるほど。じゃあ、それだと……」

実作者こそが美学を求めている

訳し方、その語の解釈、そしてそこから見えてくる著者の思考の背景まで、教授を含めた全員で疑問を出し合い、意見が飛び交う。なるほど、たしかに「ゆっくり」だ。1章ぶんのコピーが配られているが「ペースがこんな感じですから、おそらく前期には読み終わらない」と川瀬教授。ただ、だから価値があるとも。

「繰り返し読むことも大事です。一度読んでわか

伝統的文献講読ながら、授業はハイブリッド。スピーカーを通して、今ここにいる学生と遠くの学生が学びでつながり合う。



授業中、ふと学生から「もう一度、頭から丁寧に読めば理解できるような気がする」との発言が。これぞ美学的講読の利点。

らなくとも、二度、三度と繰り返して読むうちに、だんだん部分のつながりが見えてくる必要があります。私が研究していた哲学者のメルロー・ポンティは53歳で心臓発作で亡くなりましたが、彼は倒れたとき、デカルトの全集を開いていた。当時、すでに名を成した世界的な哲学者でも、常にそうして先人のテキストと対話することで、自分の思想を確固たるものにしていたんです。ここでやっているのは、それを授業として体感すること」

そして、芸術系以外の大学でも学んだ川瀬教授が藝大に来て強く感じたのは「実技の学生が、いかに哲学を求めているか」だというのも興味深い。「制作をしていて、はたしてこれでもいいのかと疑問を感じたとき、美学や哲学に指針や支えを求めるのでしょうか。むしろ芸術学科生よりも熱意をもっているのかもしれないと感じることもあります」

※1 『日本国語大辞典』（小学館）
※2 原題は『Phénoménologie de l'expérience esthétique』

日本・東洋美術史研究室 東洋美術史特講・演習Ⅰ

「クセつよ」仏像は
なぜ生まれた？

はるかな時代、遠つ国の
人の心に迫る旅

素朴でタフな民衆の力



続きまして、座学です。日本・東洋美術史専攻の学部生向け特講・演習、前期全13回中の12回目。中国美術、なかでも仏教・道教美術史が専門の齋藤龍一准教授の授業は、南北朝時代を中心に中国各地の石窟寺院に彫られた、あるいは寺院址から出土した仏像群がテーマ。今回は中国西北部に位置する甘肅省東部、陝西省北部、隣接する寧夏回族自治区という、齋藤准教授曰く「パンダとかいないので、あんまり観光客が来ない」地域。しかし、大都市から離れているがゆえに古い時代の石窟や仏像が残されており、今でも出土が続いているという。

あっかんべえ



陝西省榆林（ゆりん）の石窟にある如来坐像は「なで肩の極み」。6世紀初頭に流行した体形なのだとか。頭部と着色は後世に。

齋藤准教授お気に入りのペロ出し如来（出土地不詳／大阪市立美術館所蔵）。中国では舌を出すのは魔除けの意味があるというが、それにしても、いい笑顔。

すこい
なで肩



「この辺りにもいくつか重要な交通路があり、そこには権力をもつ支配者がいた。それに加えて、国家の力を示すという意味もあって、『この先、800キロ行くと都だよ』みたいな感じで、所要所にランドマークとして大規模な石窟がつくられたということなのだろうと思います」南北朝時代、この地域では北魏、西魏、北周と王朝が興亡。目まぐるしい国情変化のなかで生み出された仏像は、見上げるほどに大きなものから日本の仏壇サイズの小さなもの、保存状態のよいもの、よくないもの、はたまた後の世に手を加え



スケッチ時間などもはさみながら「とにかく寝させないように頑張ってる」と齋藤准教授。おもしろくて寝てられません。



られたものなど、実にバラエティに富んでいて、個性派ぞろいである。

「国の力は弱まるけど仏教はどんどん盛んになるから、仏像をどんどんつくらなきゃいけない。内戦状態の都にいちいちお伺いを立ててられないから、もういい、うちはうちでつくりまస్తుって話になって、それぞれが地元で頑張り、局地的にクセの強い仏像が生み出されたんでしょ」

藝大に着任する前は仏教美術コレクションの充実に知られる大阪市立美術館で長く学芸員を務め、中国の各地へ何度も足を運んだ齋藤准教授は、地域の特色が表れた石窟や仏像の画像をスライドで示しながら、解説を加えていく。

「石灰岩よりも柔らかい砂岩系なので彫りやすい地域なんですけど、それにしてもでかい石窟。仏像も8メートルくらいあり、周囲に見せつけようと



支配者が気合を入れてつくったのがよくわかる」

「このあたりからは100体単位で仏像が出土するんですよ。仏像の詰め合わせが」

「この簀^す巻^まきにされちゃってるのが、亡くなったお釈迦さま（涅槃^{ねはん}像）

「（立像を示し）この子（仏像）、小学校で『しっかり立ちなさい』って怒られる立ち方ですね」

「この人（仏像）の何がすごいって、この満面の笑みですよ。笑ったうえに舌まで出てる。歯が見える菩薩^{ぼさつ}は見たことありましたけど、舌を出してる如来像は、今のところこれ1体かな」

ツッコミは、あふれる愛ゆえに

内容は至極アカデミックでありながら、語り口は漫談調。愛あるツッコミに、時折笑いが起こる。仏さまをこんなにおもしろくしているのか。でもそこに、教える側の思いも込められているようだ。「西洋美術と違って漢字いっぱいだと訳わかんない、というところからのスタートですから、どうやって興味をもってもらうか。そんなに難しくなくてすよと言うしかないですよ。意外とかわいい？中国で怖い顔の仏像が出てくるのはもつと後の時代で、最初の頃はみんな優しい顔なんです。戦争が多く、実生活が乱れていたから、穏やかな顔でも見てないとやってられないよ」と

舌出し仏に重なる齋藤准教授の笑顔。しかし研究は研究、「AI頼みのレポートは厳禁」と厳しさも覗かせる。ジャンルの第一人者ゆえ、AIの元ネタもほとんどが齋藤准教授だったりするのだ。学生の皆さん、（仏顔でも）甘くないですよ。

基礎造形実技― 油彩実習

描けば

きつと見えてくる。

理論系学生、

絵筆を握って奮闘

「描くのははじめて」の学生多数

長く座ったのでそろそろ腰を上げましょう、じやないですが、次は久しぶりに動きます。といっても「筆が」ですけれどね。理論や歴史を学び深める芸術学科1、2年次には美術作品を制作する実習があり、訪問した教室では、油画に挑戦中。イゼルが林立する、実に美術学部らしい光景だ。

「4月に入学したばかりの1年生です。実技をある程度経験している学生もいれば、まったくはじめての人も。油画は初という人は多いですね」と話すのは、油画専攻非常勤講師で指導を担う齋藤功美先生。芸術学科入試では論文か鉛筆素描（石



膏デッサン)のいずれかを選択。今年の1年生で素描を選択したのは4人で、絵を描くのは高校の美術の授業以来という学生も珍しくない。

「描いていくと、ある瞬間から絵がどんどん絵になっていく。進むべき方向を絵が画家に教えてくれるんです」と齋藤先生。

まず絵画科油画専攻の版画研究室で版画の制作を体験し、その後、大石膏室で素描、グリザイユ（モノクロ画）の実習を経ての油画チャレンジ。

教室内の2カ所に置かれたモチーフの集合を、それぞれ独自にフレーミングして描く場面を決めるのだが、齋藤先生が今回、学生たちに課したテーマは「視覚世界を精読する」。つまり、モチーフの重なりを書かれたテキストとして、それを自分なりにどう読んだかを絵で表す……む、難しい。

「精読は『写实的に』ということではないんです。もちろん、細かく描くのも精読のひとつですが、唯一ではない。たとえば、大きな刷毛でひと塗りしただけで全部が描けてしまうこともあるでしょう？ それも、世界の精読のひとつじゃないかと」さらにわからなくなってきた。でもね、キャン

パスの上、それぞれかたちになっているんですよ。素人目には、すばらしく。すでに制作終盤、学生たちはラストスパート中。絵を眺めながら声を拾うと、今のおもな課題は光の当たり方をいかに表現するか、ということのようである。

制作者の視点、言葉を変える

個々のものはものとして存在する。しかし、その色は隣に置かれたものの影響を受け、微妙な陰影を表面にたたえる。

「光がどちらから当たっていて、もの同士の位置関係がそれとどう絡んで、空間というものになっているかどうか。ちゃんとしてよく見てみよう」

「ここには反射光も



準備室にある剥製や布、ガラス瓶などを組み合わせ、齋藤先生がつくったシーン。どこを切り取るかも、画家（学生）の判断。



描いているキャンパス自体も、
学生自身が実習で制作したもの。
後期はフィルム写真の実習、2
年次には日本画と彫刻を学ぶ。

あるからね。隣のものの色が、ほら、こんなふう
に影響している」（先生が光を遮ってみせると、
ものが発する色味が変わる。おー、と学生）

時には絵筆もとって実演しながら指導する齋藤
先生の隣で、真剣な面持ちの学生たち。普段は言
語による表現を強みとする彼らは、ままたらない
ことに、きつともどかしさを感じているはず。し
かし、そこそが実習の意義。実際、絵筆を握る
前と、心境は大きく変化しようだ。

「光とか反射とか、そんな些細なことが重なり合
った……自分が普段見ている世界は不安定なもの
なんだと、描いてはじめて知りました」

「何でもないものに見えていた筆致、そのひと筆
の役割がわかると、絵の解釈が変わる。このあと
美術館に行つて鑑賞したとしても、あまり言葉を
はさみたくないような……『俺、なんでここにい
るんだろ？』って気持ちになりそう」

発せられる実感のひとつひとつに頷く齋藤先生。
自身は油画で入学し、大学院から芸術学に進んで
博士号を取得するという、学生たちとは逆のコー
スを歩んだ立場ゆえ、感慨はひとしおなのでは。
「制作者としての視点は、今後、彼らが理論を研
究したり批評をしたり、キュレーションをしたり
するときに必ず生きてくる。こうした体験ができ
るのも、芸術大学ならではの思いますね」

美学研究室
美学演習Ⅰ

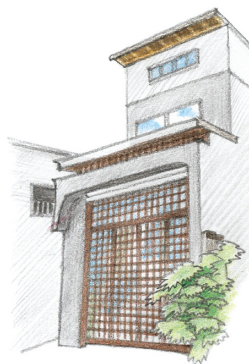
史上初・

取材班が授業素材に!?

コラボ型実践的美学講義



HIGURE 17-15 cas
contemporary art studio



他校と連携して展覧会を開催

さて、座学に加えて、美学研究室からもうひと
コマの授業を見学。現代美術の研究者であり美
術批評家である林卓行教授の美学演習Ⅰ、見学先
として案内されたのは学外のギャラリー。ここで、
授業に関連した展示が行われているという。入る
と、コンパクトな白いスペースの奥半分、高床に
なった場所に、ブロンズや陶器、スチール、石な
ど素材も大小も異なる作品が6点。キャプション
には「淵（ふち）どり」という題がつけられている。

この展覧会は、武蔵野美術大学大学院修士課程
彫刻コースと芸術文化学コースが連携し2004
年にスタートさせた「彫刻と対話法」シリーズ12

7/5-29の会場となった西日暮
里の「HIGURE17-15 cas」。こ
のあと会場を移し、7/28-8/8
には後期の展示が開催された。

回目。25年度から藝大美学研究室との協働企画となり、藝大からの参加者は美学専攻大学院2年のSさん、東洋美術史専攻の学部4年生Aさん。いずれも林研究室の所属ではない。

「僕の研究室の学生は、いたりいなかったり。哲学というより現代美術がどうできあがるか、できあがったものにどんな反応が起こるかを見たり考えたりして記述するのがテーマだと思ってます。武蔵美の先生とはアーティストと批評家という関係で付き合いが長かったので、その縁で」(林教授)

これはさぞかし個性的な授業が……と思いきや、「今日は授業はとくにないので、展示の成果など、学生に直接聞いていただければ」と林教授。

「先生、もしかして……僕らを利用しましたね？」

同席した本誌F編集長の言葉に、ニヤリとする教授。つまりこれは「広報誌の取材を受ける」授業ってことですか？ これはかつてない展開。と



上から、Oさん＝織田花香里さん（壁掛けのブロンズ作品2点を制作）、Aさん＝安藤詩麻さん、Sさん＝白井鉄郎さん。

生きた作家と触れ合う機会を

いうことで、藝大の2人と武蔵美の修士2年で作品の作者でもあるOさんに急遽インタビューを開始する。えーと、まず「淵どり」って何ですか？

どうやって決まったんだっけ……と顔を見合わせる3人。林教授のフォロワーによると、当初、教授陣から提起されたキーワードは「支持体」。物理的に作品を支えるものという意味で、絵画ならばキャンバスや紙がそれに当たる。では、彫刻の支持体とは何か？ それを、展示を通して示すが、授業の課題だったという。



林教授にすっかり手玉に取られた(?)取材班。さて、右の人は誰でしょう？ ペンとノートを持っているということは……。



藝大班が制作した展覧会図録『淵どり』は文庫サイズで全188ページ。制作者のつぶやき、エッセイ、小説、評論と内容充実。

「『支持体とは何か』『あなたにとつての支持体は』と話していく、そのプロセスのなかで偶然に『淵どり』にたどり着いた」とSさん。Oさんら5人の作家たちが作品づくりを進める一方、藝大の2人は印刷物を担当。Sさんと検討を重ね、Aさんが書き上げた展覧会のキャプションからは、悠久の時の流れ、その淵に作家と作品、そして鑑賞者である自分たちがいる……そんな思索を感じ取れた。そして、こんな一節が目に残る。

「作家が長い時間をかけて同じひとつの作品を作り上げるとき、その作品はつねに彼らの生きた人生とともにある」

「芸術学科の学生は基本、死んでる人しか相手にしないんです。美学で読むテキストも、多くは亡くなった人が遺したもの。こうしてリアルタイムの場に身を置くことは、自分たちの考え方やものの見方を見直すきっかけになるかもしれません。ものをつくる人たちが目の前にいて、それを感じることが、ミケランジェロが創作をしているとき

のイタリアはどうだったのか、リオタールが書いていた頃のフランスは……と、研究対象の人たちの時代の空気に対する想像力につながれば」
得られた感覚をそれぞれの研究に生かしてほしいと林教授。その思いを知ってか知らずか、学生たちは「楽しかった!」と笑い合う。体験は残り、つながる。ひとときの淵に確かな予感が満ちる。

*1 ジャン＝フランソワ・リオタール。20世紀フランスの哲学者。著作に『現象学』『ポスト・モダンの条件』など。

西洋美術史研究室 西洋美術史演習C

芸術作品は時代を映すもの。 自分独自の「視点」を磨く

素材にフォーカスして作品を分析

芸術学科探訪もいよいよ大詰め。芸術、美術を学ぶといえど誰もが思い浮かべるであろう西洋美



術史、大学院と学部共通の演習にお邪魔します。

前期講義で行われていたのは文献講読で、ドイツの美術史家、モニカ・ヴァグナーの『芸術の素材』を訳しながら皆で精読するという、先述の美学研究室（↓p.29）と同じ形式。担当の佐藤直樹教授は、藝大の授業で読み上げる原稿をもとに執筆した著書『東京藝大で教わる西洋美術の見かた』（世界文化社）なども好評な美術史家である。「テーマは『素材のイコノグラフィ』（図像学）。僕は18世紀以前の美術が専門だけど、今回扱うのは現代美術です。現代は素材がもつ力や歴史的意味を扱う作家たちが多く、そこを切り口として美術を論じるヴァグナー氏の提案は、古い時代の美術を研究する際のモデルにもなるだろう」と

見学した回では、土を扱った作品を論じる。日本では工芸の素材として重宝されるが、絵画や彫刻を純粹芸術の筆頭とするヨーロッパではヒエラルキーが低め。しかし、現代美術家の作品によって価値が見直されつつあり……という内容を、担当の学生の訳文と資料で読み解いていく。

ウォルター・デ・マリア、ヨーゼフ・ボイス、白髪一雄、ジャン・デュビュッフェ、アンゼリム・キーパー……土という素材と格闘する現代美術のシークエス。そして、これら膨大な作品が頭に入っている美術史家の知識の奥行きたるや!

「僕も毎回、『こういう作家、いるんだ!』と
思ってますよ(笑)。美術史はただ通史(歴史の流れ
を体系的に学ぶこと)を勉強していればいいわけ
ではなく、どういう作品をおもしろいと思うか、
そのセンスを磨くことが大事。そのためには作品
を、できれば実物をたくさん見て考える癖をつ
けることだと思います。実物
から得ているものをどう言
語化できるか、そこが分か
れ目な気がします」



学生と同じ目線で発表を聴き、
輪に入って議論する佐藤教授。
「早く、たくさん読みたいから」
訳文作成にはAI使用を推奨し、
AIをコントロールする力を養う。

世界中で生み出される新しい作品。「つくり続け
る力こそがアーティストに必要な才能」と佐藤教
授は言う。同時に、それを広く伝え、後世に受け
継いでいく学問もまた尊いものだ、授業を見て
実感する。芸術を学ぶ学科、その学びの深遠……。



実物を見るため年に一度は渡欧。
「何度も見ていると、何とも感
じなかった作品が、突然語りか
けてくることがあるんです」



「芸術」学科でなく「芸術学」科

「あの……芸術学科を説明するときにいつも難し
く感じることもありますが、藝大は『芸術』学科じ
やないんですね。『芸術学』科」

!! 最後の最後になって気づきました。つい

「芸術」で切っていました。アワワワワ。

「フフフ。じゃあ芸術学とは何ぞや?という
と、かつて藝大で美学を教えていらした武藤三
千夫先生によれば、ドイツ語の『芸術科学』、
Kunstwissenschaftを訳したんだろうと。芸術を
あらゆる角度から学ぶ、それが美学であり、美術
史であり……。こうした学問がなければ、藝大は
技術を修練するだけの場で、ユニバーシティになら
ない。ここに、芸術学科の大きな役割を感じます」
芸術は、技術だけでは生み出せない。実技の学
生たちは日々、さまざまなことに悩み、考えなが
ら美術と向き合う思想家でもあるのだ。

「アーティストの卵たちに『こんなアプローチも
あるよ』と選択肢を用意できる科が、やっぱり必
要でしょう。僕らの方も、新しいものの見方を現
代美術から学んでいるわけですから。他科の学生
や先生と交流することで、藝大全体で、今の芸
術に関わってほしいと思っています」

*1 原題『Das Material der Kunst』。2013年刊。

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介



「東京藝術大学と中国人留学生」プロジェクト第3弾となる展覧会を開催

今号の留学生特集、歴史編（P 12）に登場した牛島大悟准教授らが手がける展覧会『東京藝術大学と中国人留学生』胡根天から現代まで、展覧会が11月21日～12月5日、大学美術館陳列館にて開催されます。

「東京藝術大学と中国人留学生」プロジェクトの第3弾となる今回、焦点を当てるのは、東京美術学校で学び、帰国後、広州の近代美術教育に大きく貢献した胡根天。中国人留学生の歴史を、美術作品、音楽、資料、そして現代の留学生・卒業生らによる作品なども通して紹介するほか、留学生たちの軌跡を可視化したデジタルアーカイブも壁一面の大画面で公開。現在の国際交流や未来へとつなげることを目指します。入場無料。ぜひ足をお運びください。

アートは人が生きる力である——『芸術未来研究場展2026』開催

「アートDXやアート×ビジネス、キュレーションなど6つの領域が互いの枠を超え、「アートは人が生きる力である」という確信のもと、人類と地球のあるべき姿を探索する「芸術未来研究場」。本展では、科学分野や他機関と連携した実験・実践の具体事例を展示。アートが喚起する想像力を通じ、人類と地球の未来を探索し変革を起こす試みを体験できます。詳しくは公式ウェブサイトへ。
<https://geidai-park-exh.geidai.ac.jp/>



昨年行われた『芸術未来研究場展2025』の様子
写真＝Naoto Kozuka

さまざまなプレイヤーがつながり、社会の未来を創造するプラットフォーム「芸術未来研究場」が11月20日～12月2日、大学美術館、大学本部棟1階など上野キャンパス各所で『芸術未来研究場展2026』を開催します。



藝大アートプラザ入り口

「日本ならではのアート」とは？ 藝大アートプラザで『藝大NIPPON』展

上野キャンパスの構内にある、藝大ゆかりのアーティストの作品を展示・販売するギャラリー「藝大アートプラザ」では、10月9日～11月23日に、企画展『藝大NIPPON』展を開催します。

美は、つくりだすもののなか。それとも、見つけるもののなか。それぞれの作品が示す多様なアプローチを通じて「日本ならではのアート」とは何かを探索展示です。入場無料。詳しくは公式ウェブサイトをご覧ください。
<https://artplaza.geidai.ac.jp/>

大学美術館(上野)の 展覧会

◎ 本館



大学美術館 本館

1月28日～2月2日
※陳列館でも開催
出光美術館開館60周年記念
藝大でみる珠玉の出光コレクション
3月27日～5月23日

◎ 陳列館



陳列館

芸術未来研究展2026
11月20日～12月2日
東京藝術大学大学院美術研究科
博士審査展2026
12月11日～22日
※陳列館でも開催
Avec Le Balcon 2026
1月9日～11日
※本館1階エントランスにて開催
第75回 東京藝術大学
卒業・修了作品展

三上亮 退任記念展
(ひみつ)行為の無作為
10月3日～18日
三和酒造×東京藝術大学デザイン科
受託研究プロジェクト
『Tichiko PARSONS AWARD
2026 EXHIBITION』
10月23日～25日
古川聖 退任記念展
共振する音とメディア～メディア
アート・ミュージックの現在～
10月31日～11月8日
ブンボニチノ文保日・展 2026

演奏会

◎ 取手館

藝大取手コレクション展2027(仮)
3月上旬～下旬

11月11日～15日
東京藝術大学と中国人留学生
「胡根天から現代まで」展
11月21日～12月5日
第11回 東京都特別支援学校
アートプロジェクト展
1月6日～15日
GA キュラトリアル実践演習展(仮)
3月19日～4月4日

※奏楽堂が改修中のため、
会場は各公演ごとに異なります
オルガンシリーズ
11月1日 15時
一般 4000円
学生 2000円
会場…聖レゴリオの家 聖堂
東京藝術大学音楽学部
附属音楽高等学校
第38回 定期演奏会
11月4日 18時

S席 2000円
A席 1000円
会場…北とびあ さくらホール
藝大フィルハーモニア管弦楽団
定期演奏会(藝大定期 第436回)
11月6日 18時30分
S席 5500円(学生 3000円)
A席 4000円(学生 2000円)
会場…戸田市文化会館 大ホール
藝大フィルハーモニア管弦楽団合唱
定期演奏会(藝大定期 第437回)
11月12日 18時30分
S席 6000円(学生 3000円)
A席 4000円(学生 2000円)
会場…サンパール荒川 大ホール
藝大邦楽定期 第92回
11月18日 17時
4000円
会場…日本橋公会堂
藝大シンフォニーオーケストラ定期 第74回
(藝大定期 第438回)
11月19日 18時30分
S席 4000円(学生 2000円)
A席 3000円(学生 1500円)
B席 2000円(学生 1000円)
会場…さいたま市文化センター 大
ホール

藝大ウィンドオケ定期 第102回

11月21日 14時

要事前申し込み

会場…音楽学部 第6ホール

モーニング・コンサート11

11月26日 19時15分

要事前申し込み

会場…音楽学部 第6ホール

藝大プロジェクト2026

フアリヤ生誕150年企画

『ペドロ親方の人形芝居』

11月28日 14時・17時

要事前申し込み

会場…千住校地 第7ホール

佐々木典子 退任記念演奏会

12月4日 18時30分

一般 2000円

学生 1000円

会場…銀座ブロッサム中央会館

藝大21 第19回

奏楽堂企画学内公募演奏会

12月16日 18時30分

要事前申し込み

会場…シアター1010

藝大室内楽定期 第53回

2月6・7日 時間未定

要事前申し込み

会場…音楽学部 第6ホール

藝大チエンバーオケ定期 第48回

2月12日 19時

S席 4000円(学生 2000円)

A席 2500円(学生 1300円)

会場…日本製鉄 紀尾井ホール

創造の杜 2026

2月15日 時間未定

料金未定

会場未定

菅英三子 退任記念演奏会

2月19日 19時

要事前申し込み

会場…日本製鉄 紀尾井ホール

伊藤恵 退任記念演奏会

2月28日 14時

要事前申し込み

会場…日本製鉄 紀尾井ホール

モーニング・コンサート12

3月18日 11時

要事前申し込み

会場…音楽学部 第6ホール

第10回 東京藝大ジュニア・アカデミー

成果披露演奏会

3月28日 第一部 11時20分/第二部 14時10分

要事前申し込み

会場…音楽学部 第6ホール

2026年度 藝大21 第20回

奏楽堂企画学内公募演奏会

3月30日 時間未定

料金未定

会場…旧東京音楽学校奏楽堂

*一部の公演を除き、全席指定

*展覧会・演奏会の名称、会期・日時

などが変更になる場合があります。

最新情報は、東京藝術大学公式ウ

ェブサイト(<https://www.geidai.ac.jp/>)を

ご覧ください。

*展覧会についてのお問い合わせ

東京藝術大学美術館

☎050-5541-8600

(ハローダイヤル)

*演奏会についてのお問い合わせ

東京藝術大学演奏芸術センター

☎050-5525-2300

*演奏会チケットの取り扱い

ヴォートル・チケットセンター

☎03-5535-1280

チケットぴあ

<https://pia.jp/>

イープラス

<https://eplus.jp/>

東京芸術大学生活協同組合

(店頭販売のみ)

☎03-33828-5669

🌀 編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学内 『藝える』編集部

Fax: 03-5685-7760

E-mail: contact@ml.geidai.ac.jp



🌀 藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

🌀 お問い合わせ

社会連携課渉外企画係 ☎050-5525-2400

藝大基金ウェブサイト <https://fund.geidai.ac.jp/>

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2026年1月から6月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます（掲載をご承諾された方のみ）。

[個人の皆様]

宗次徳二様 5000万円	金口浩様 1万円	田中良明様 1000円	白坂好広様
田中秀夫様 500万円	兼松嘉治様 1万円	青山夏実様	鈴木幸光様
麻生巖様 100万円	川口百合子様 1万円	阿部路様	関口真莉様
瓜生健太郎様 100万円	川崎昭久様 1万円	石川麻美子様	高木雄太様
金子雅充様 100万円	久野一恵様 1万円	井上正英様	高橋賢佑様
国谷史朗様 100万円	小松美咲様 1万円	今井梨乃様	土嶺由美子様
近藤京子様 100万円	志村明善様 1万円	岩澤延枝様	富島寛様
近藤寿郎様 100万円	杉野森創様 1万円	宇佐美敏男様	鳥山静子様
白倉ひろみ様 100万円	田中綾一様 1万円	内田薫様	長坂遼太様
佃秀昭様 100万円	塚原克孝様 1万円	遠藤義明様	中島芳奈子様
濱地真知子様 100万円	徳住光則様 1万円	大川聡様	中野信子様
山口トミエ様 100万円	厩屋正様 1万円	大木千秋様	中村嘉孝様
和田哲義様 100万円	仲川信正様 1万円	大越基喜様	羽鳥典子様
中山昌樹様 51万円	中谷茂次様 1万円	太田円理様	平井佳樹様
小倉葉子様 50万円	袴田容様 1万円	小笠原かやの様	平野信行様
河原あき様 50万円	馬場恒雄様 1万円	加賀谷早苗様	平松英子様
原田智史様 50万円	早川智子様 1万円	糟谷英一郎様	廣瀬俊廣様
牧田身知子様 50万円	林安喜子様 1万円	亀澤宏規様	福島武様
川田茂樹様 30万円	原田敬一郎様 1万円	北修爾様	藤本いく代様
加藤辰也様 10万円	藤井隆史様 1万円	北川翔一様	宮下誠一様
竹石明子様 10万円	船山隆様 1万円	古閑久美子様	宮島恵一様
濱島啓太様 10万円	細谷和夫様 1万円	興石春子様	三好克美様
伊藤眞理子様 5万円	本田修一様 1万円	小林裕之様	森下祐子様
高橋典秀様 5万円	前田周一様 1万円	坂口棕治朗様	柳澤孝夫様
野島浩一郎様 5万円	三浦尚之様 1万円	白井雄一様	山中景晶様
福澤俊彦様 5万円	三界あゆち様 1万円	白木香葉子様	吉田道雄様
川倉健治様 4万円	村山則子様 1万円		
高山和之様 3万 1000円	森岡幸江様 1万円		
小川洋司様 3万円	門田伸一様 1万円	[法人などの皆様]	
宮崎孝江様 3万円	山形起生様 1万円	トヨコモ株式会社 1000万円	
青木和子様 2万円	山田貴之様 1万円	株式会社独立総合研究所 300万円	
野中武様 1万 5000円	吉澤真由美様 1万円	株式会社麻生 100万円	
青木重夫様 1万円	吉田麻男様 1万円	株式会社韋駄天 100万円	
阿部悦郎様 1万円	柴田晃希様 5000円	開成開発株式会社 20万円	
磯貝紀枝様 1万円	白水芳枝様 5000円	株式会社日本ウィルテックソリューション 14万3395円	
伊藤公一様 1万円	松山実様 5000円	一般財団法人桃園学園	
乾美香様 1万円	保原多美子様 5000円	株式会社アルティア	
井上加寿子様 1万円	山田守正様 5000円	Google LLC	
今井葉々美様 1万円	北岡冴子様 3000円	健康長寿産業連合会	
色本善信様 1万円	寺谷大作様 3000円	株式会社サイバーエージェント	
上原昇様 1万円	有山真弓様 2000円	東京藝術大学ジュニア・アカデミー修了生による演奏会	
氏原孝貴様 1万円	織方弘子様 2000円	実行委員会	
氏原瑞代様 1万円	河野里香様 2000円	株式会社日本典礼	
岡田光彦様 1万円	高崎正勝様 2000円	東日本旅客鉄道株式会社	
小田島雅子様 1万円	森迫紀子様 2000円	三井住友トラストクラブ株式会社	
小原幸子様 1万円	牛田尚様 1000円	山田産業株式会社	
香川昌代様 1万円	白堰恵里子様 1000円	1991年デザイン科卒業35周年同窓会	